2025 7.7 vol.1114

JAグループ

JA全農ウィークリー

JA ZEN-NOH WEEKLY

Web版
JA全農ウィークリーは
こちらから

https://www.zennoh-weekly.jp/

2面
優秀な成績の農機センター職員を表彰
（宮城県本部）

3面
農業資材店舗のレイアウトを研修
（岡山県本部）

配送先変更（住所・宛名）、
配布部数変更はこちら

https://forms.office.com/r/yUWVHyVVtK

全農 ZEN-NOH
食と農を未来へつなぐ。

News!

優秀な成績の農機センター職員を表彰

士気向上と提案活性化へ

宮城県本部

宮城県本部は、ＪＡ農機職員の士気向上と組合員に向けた提案活動の活性化を目的とした「ＪＡ農機拡大一斉推進運動成果発表大会」を５月30日にＪＡビル宮城で開催し、ＪＡ農機センター職員・メーカー総勢72人が出席しました。

大会では、前年度の年間実績で、総合ＪＡ（会社）・個人・メーカー別・ＪＡ推薦・共同購入コンバインの五つの部門で特に優秀な成績を収めた農機センター職員、ＪＡ（会社）を表彰しました。

「共同購入コンバイン提案活動表彰式」で最優秀賞を受賞したＪＡみやぎ登米の鈴木和稔農業機械課長は「農機部門だけではなく、営農・金融・ＴＡＣ部門が密に連携し、組合員に最適な提案を図る地道な活動が実を結んだ」と話しました。

共同購入コンバイン部門
JAみやぎ登米事例報告

宮城県本部は、農機事業をはじめ、さまざまな取り組みを通じ、今後も提案活動を支援します。

主要部門の最優秀賞受賞者は次のとおり。

▽総合ＪＡ（会社）＝いしのまき▽個人推進の部＝遠藤彰寛（みやぎ登米）▽個人修理整備の部＝狩野博（新みやぎサービス）▽個人ニュースターの部＝尾形優樹（加美よつば）、佐々木遥輝（新みやぎ）▽共同購入コンバイン＝山田喜一（新みやぎ）

個人部門推進の部
受賞者集合写真

News!

モーっと山形県産牛乳を飲もう

「牛乳月間」にJR駅で高校生にPR

山形県本部

山形県牛乳普及協会（事務局：ＪＡ全農山形）は６月２日、ＪＲ山形駅と赤湯駅で「牛乳月間」をＰＲしました。登校中の高校生に県産牛乳２００ミリリットルと牛乳月間啓発パンフレットを、山形駅で４００セット、赤湯駅で２００セット配布しました。

世界各地で乳牛の放牧が始まることから、国連食糧農業機関（ＦＡＯ）は６月１日を「世界牛乳の日」と定めており、それに合わせて日本でも６月を「牛乳月間」としています。

学校給食が終了し、牛乳を飲む機会が少なくなった高校生をターゲットに、コロナ禍の２０２０年と21年を除き、07年から毎年実施しています。

JR赤湯駅前でパンフレットと牛乳を配布

山形駅では、「６月は牛乳月間！毎日、県産牛乳を飲もう」と呼びかけ、牛の帽子や着ぐるみを着用した同協会事務局と山形県ＪＡ女性組織協議会員の他、山形のご当地ヒーロー「言霊（ことだま）戦士ヤンバイダー」も牛柄のマントで応援に駆け付け、県産牛乳の消費拡大をアピールしました。

今後も、子育て世代向けイベントでの県産牛乳配布などを通して、県産牛乳のＰＲを積極的に行い、消費拡大につながる取り組みを継続していきます。

News!

農業資材店舗のレイアウトを研修

陳列を見直し、商品の魅力を引き出す売り場に

岡山県本部

岡山県本部は6月4日、JA晴れの国岡山で資材店舗の販売力強化を目的とし、商品の魅力を引き出すための「VMD（ビジュアルマーチャンダイジング）研修会」を開催しました。

外部講師を招いて、午前の座学と午後の実践の2部構成で研修を行いました。午前はVMDの基本理論を豊富な多店舗の事例を通じて学びました。午後は実際に営業している店舗へ移動し、3グループに分かれ売り場のレイアウト改善に挑戦しました。

来店客の視線を集め、店内を回遊してもらうための「マグネットコーナー」づくりをテーマに、実際の商品を使いながら工夫した陳列を行いました。陳列を実践する際には職員同士の活発な意見交換も行われ、商品の陳列を見直した売り場は、商品の良さが格段に伝わる魅力的な空間へと生まれ変わりました。

参加者全員がBefore・Afterの劇的な変化を体感し、VMDの効果を実感する有意義な研修となりました。

座学研修で事例を学習

店舗研修でレイアウト改善に挑戦

News!

プロ自転車チームとBBQイベント

広島県産農畜産物を提供し魅力を発信

広島県本部

広島県本部は5月31日、昨年度からサプライヤーとして応援している、地元広島のプロ自転車ロードレースチーム「ヴィクトワール広島」と共に三原市でBBQサイクリングイベントを開催しました。

【JA全農ひろしまBBQサイクリングin中央森林公園～広島大会のコース、走ってみん?うまい広島の食も堪能しよう!～】と題して、参加者44人とヴィクトワール広島の選手が、サイクリングを楽しみました。コースは、7月5日に開催された「JBCF 2025 山陽建設 広島三原ロードレース」と同じものでした。県本部職員も参加し、イベントを盛り上げました。

サイクリングの後にはバーベキューを行い、広島血統和牛「侍beef元就」、広島県民米「あきろまん」、キャベツやタマネギなど広島県産農畜産物を県本部が提供。参加者から「広島のおいしい食材をこれからも食べたい」との声が聞かれました。

広島県本部では今後も、地元で活躍するスポーツ選手を広島の食で応援するとともに、広島県産農畜産物の魅力発信に取り組みます。

BBQサイクリングイベントの参加者集合写真

参加者と一緒にバーベキューを楽しむ柴田雅之キャプテン

精米工場の現地視察会・記者説明会を開催

米生産・流通の現状、全農の取り組み説明
メディアの正確な報道につなげるために理解を促進

全農は6月24日、関西地区のメディアを対象に兵庫県内にある精米工場の現地視察会・記者説明会を実施しました。25日には東京でも記者説明会を開催しました。【広報・調査部】

撮影会の様子（張り込み）玄米をベルトコンベヤーに投入する「張り込み」と呼ばれる作業。砥石（といし）で玄米の表面に傷をつけて糠（ぬか）を削りやすくしたあと、米粒を回転させて削るなど3段階で精米する

撮影会の様子（積み荷）精米が袋詰めされた後、配送先別にロボットアームで積み上げる。玄米の投入から袋詰めまでは6時間ほどかかる

米価格の高騰により、日本人の主食である米への関心が高まる中、米生産・流通の現状、全農の取り組みへの理解を深めることを目的に開催しました。

玄米から製品まで稼働率は150％に

精米工場の視察会では、玄米の投入から精米工程、袋詰めされた製品の積み上げ作業までを公開しました。

同工場では、全農が落札した政府備蓄米に加え、随意契約米も取り扱っています。現在、1日当たり約200㌧、月間では約5000㌧を精米し、主に関西圏に出荷しています。平時の精米量は月約3300㌧ですが、備蓄米の流通開始に伴い、稼働日数や時間を拡大し、稼働率は150％にまで上昇しています。

納得できる価格で安定的供給に努力

視察後は、大阪ＪＡビルで記者説明会を開催しました。全農の金森正幸常務理事は「急激な価格高騰により、消費者の米離れが懸念される。生産コストの上昇を踏まえ、生産者が営農を継続できると同時に、消費者にとっても納得できる価格が形成されることを望んでいる」「年一作の米の生産地から消費地まで、年間を通じて量・価格の両面で安定的に供給する役割が一層発揮できるよう、ＪＡ・お取引先様のご理解・協力の下、今後とも努力を重ねていきたいと考えている」と述べました。

今回、関西地区での現地視察会・記者説明会は初の試みでしたが、14社・27人のメディアが参加（東京は17社・26人が参加）。この取り組みにより、全農の考えについて報道を通じて伝えることができました。今後も、情勢を的確に捉えながら、情報発信に取り組みます。

記者説明会で説明する金森正幸常務理事（右）と藤井暁米穀部長（左）

東京での記者説明会の様子はこちら

JA ズームイン

特産柿の集荷・販売を強化
選果場整備、規格外品を活用

JAいび川（岐阜県）

概要	2025年3月31日現在
正組合員数	7670人
准組合員数	6960人
職員数	242人
販売品取扱高	23億2千万円
購買品取扱高	26億9千万円
貯金残高	1637億8千万円
長期共済保有高	2620億3千万円
主な農産物	米、麦、大豆、茶、柿、イチゴ、梅など

岐阜県のJAいび川は、美濃地方の西濃地域の北部に位置し、揖斐郡一円を管内としています。豊かな水と自然を生かした農業を展開し、主要農作物として水稲、麦、大豆、イチゴ、茶、柿などを栽培しています。中山間地では、揖斐川町春日地区の薬草や久瀬地区の小菊も有名です。

2022年に大規模リニューアル工事を行った果実共同選果場

保管場所を増築し選果機も高性能に

JAいび川は、特産品である柿の集荷後の保管場所の増築、トレー式選果機への更新、検査機で形や糖度などを精密にチェックし品質の保証につなげるため、選果場の機能整備工事を実施し、2022年5月に竣工しました。これまで多くの労働力を割いていた箱詰め作業も機械化し、省力化を図っています。

最新の施設で特産の柿の選果に取り組む選果員

規格外品の活用も重点 取扱量を年々増やす

第10次中期経営計画（22～24年度）で、農業者の所得増大に貢献するため、柿の規格外品の活用拡大に取り組んできました。取扱量は、22年度は74・4トン、23年度は67・6トン、24年度は200・9トンと増加しています。

9月から12月までさまざまな品種の柿栽培に取り組んでいる

特に24年度は気温が高い時期が長く、雨天が少ないことで日焼け被害や着色むらが発生。また、果樹カメムシ被害が多発したことで規格外品が増加しました。

23年度と比較して正品率は低下しましたが、従来は廃棄していた柿を規格外品として集荷・販売することで、所得の確保に努めました。

関係機関と協力し秀品集荷率の向上へ

今年度が初年度となる第11次中期経営計画では、秀品集荷率を改善させる目標を立てました。今後、大野町かき振興会や揖斐農林事務所などの関係機関と協力し、害虫被害の防止に向けて、防除指導だけでなく地域ぐるみで行う防除対策を呼びかけます。秀品集荷率を今年度は38％、27年度には45％まで向上させていく予定です。

BB肥料の魅力とは!?

小谷さんが取材報告

工場から生産者まで訪ねました
モロッコからやってきた原料
環境にやさしい低コスト肥料に

JAグループには、北海道から九州まで15県に18のBB肥料（粒状配合肥料）工場があります。「地球環境にやさしく、生産現場の使いやすさにも対応したBB肥料」。肥料工場や肥料を愛用する生産者を取材した小谷あゆみさんが、BB肥料の魅力を報告してくれました。

粒のまま配合〝エコな肥料〟

皆さん、BB肥料ってご存じですか？　BBとは、Bulk（粒）Blending（配合）の略で、原料を化学合成せず粒のままブレンドした肥料のことです。一般的な「化成肥料」が、窒素・リン酸・カリウムなどの原料成分に熱を加えるなどの処理をして生成するのに対して、BB肥料は、それぞれの原料を粒（バルク）のまま配合（ブレンド）するので、製造工程にかかる手間やエネルギーコストが少なく、エコな肥料だと言えます。

オーダーメイドのBB肥料

鹿島港の大型貨物船に潜入

最初に訪ねたのは、茨城県鹿嶋市と神栖市にまたがる鹿島港。国内はもとより世界から貨物船が寄港します。4月のある日、モロッコから2カ月以上かけて、リン安とリン鉱石3万4000㌧を積載した大型貨物船ブレイブスター（BRAVE STAR）が着岸しました。2月にモロッコを出航し、西日本の二つの港を経て、国内3番目の寄港地が鹿島です。取材許可を得て、荷揚げ中の貨物船に乗り込みました。

貨物庫を上からのぞくと、巨大な砂山に見えるのは、6000㌧のリン安です。大きなクレーンはまるで巨大なUFOキャッチャーで砂をつかんでいるように見えます。ひとつかみ、およそ7㌧。クレーン作業1回分で10㌧トラックの荷台は、ほぼ満杯です。

リン安を載せたダンプが向かうのは、港から1㌔の全農グリーンリソース㈱鹿島支店。肥料原料の保管業務などを行う事業所です。倉庫の中で、原料を手に取ると、砂のように見えていたのは直径2～4㍉の粒々です。全農耕種資材部肥料課の手代木大地さんに伺いました。

「こちらがモロッコ産の肥料原料、リン安です。BB肥料は、こういった粒状の肥料原料を混ぜ合わせるだけで容易に作れるので、原料の配合を変えれば、各地域、作物、土壌に適したオーダーメイドの肥料を作ることができるのです」

鹿島港に入港している貨物船

農ジャーナリスト・フリーアナウンサー
小谷あゆみさん

石川テレビ放送のアナウンサーを経て現在はフリー。野菜を作るアナウンサー「ベジアナ」として家庭菜園歴は25年。農ジャーナリストとして、都市農村交流や、生産と消費のフェアな関係をテーマに全国で取材、講演、シンポジウムでの司会やコーディネーターなどを行う。日本農業新聞ほかでコラム連載中。農林水産省・世界農業遺産等専門家会議委員なども務める。

BB 肥料の原料リン安の前でインタビュー

（左から）JA グリーンとちぎの伊澤さん、小谷さん、黒瀬さん、全農耕種資材部の手代木さん、JA グリーンとちぎの稲葉洋介部長

ビール大麦生産者の黒瀬さん

宇都宮市で混合・袋詰め

次に訪ねたのは、栃木県宇都宮市にある㈱JAグリーンとちぎです。倉庫にはモロッコ産のリン安とは別に、中国産のリン安の山も見えました。海外情勢が不透明となっている状況の中、安定供給を使命としている全農は、リスクヘッジのためにさまざまな国から分散して輸入しています。

グリーンとちぎの生産ラインには、混合機を経て袋詰めする包装機があり、制御室では製造工程の流れを確認するほか、配合比率を変える操作もできます。完成したたばかりの肥料「ファイト055」の袋の中を見せてもらいました。気になるのは、配合むらができていないかということですが……、手に取ってみると、数種類の原料がまんべんなく混ざり合っていることが分かります。

JAグリーンとちぎ肥料部の伊澤卓也さんによると、混合機で均一に配合するようチェックしているそうです。さらに、BB肥料の特徴は「化成肥料と違って、燃料も使いませんし、工業用水も使いませんので、環境にやさしいのも特徴です。また、工場も簡易で、大規模な施設も必要ないため、製造工程上、低コストで肥料を作ることができます」とのこと。

使って収量アップ面積拡大へ

実際にBB肥料を使っている農家を訪ねました。宇都宮市の黒瀬勇磨さんは、就農4年目。ビール大麦の面積70ヘクタール。JAうつのみや管内屈指の生産量を誇り、祖父から引き継いだ営農組合で組合長を務めています。効率よく圃場（ほじょう）を管理する営農管理システム「Z－GIS」を導入し、地域の水田を引き受けている頼もしい存在です。

黒瀬さんは去年、オーダーメードのBB肥料を作りました。石灰と肥料を2回に分けてまく手間を一度にしようというのが狙いでしたが、その際に行った土壌診断により、リン酸が適正値より低いことが分かり、リン酸を多めに配合したオリジナル肥料を作りました。

黒瀬さんに効果を伺うと、「施肥作業が1回になったこと加えて、収穫量が上がりました。これが一番大きかったです」と、話してくれました。茎数を増やす「分げつ」に必要なリン酸が十分行きわたったことで、収量アップにもつながったのです。青々とした穂が揺れる大麦畑を見渡しながら黒瀬さんは、「田んぼを余らせずに引き受けて、見渡す限りの大麦畑にしていきたい」と夢を語ってくれました。

環境、生産効率、意欲向上にもつながるBB肥料、もっと広まっていくといいですね。

【本編】BB肥料の魅力とは!?／小谷あゆみが紡ぐ全農ストーリー（PR）

今回の取材の様子をまとめた動画はこちら

COUNTDOWN JAPAN
JA全農提供FMラジオ番組（TOKYO FM／JFN38局）毎週土曜日13：00～13：55
東京・半蔵門のアースギャラリースタジオより生放送！

「栃木県産にっこり梨SODA」7日発売

伊藤園×ニッポンエール 梨農家を応援

全農と株式会社伊藤園は「ニッポンエール 栃木県産にっこり梨SODA」を共同開発し、伊藤園から全国の量販店で7月7日に発売します。【営業開発部・栃木県本部】

「にっこり梨」は、「新高」と「豊水」を掛け合わせた栃木県オリジナル品種。大ぶりな形状が特徴で、果肉は糖度が高く、ジューシーな味わいを楽しめます。

「ニッポンエール　栃木県産にっこり梨SODA」は、「にっこり梨」の甘さを味わえる思わずにっこりしてしまうおいしさの炭酸飲料（果汁1%）です。

パッケージには、実りある栃木の梨園をイラストで描くことで、1玉ずつ丁寧に収穫する生産者の温かみを伝えています。生果の販売拡大を願い、この製品を全国にお届けすることで、「にっこり梨」農家の皆さまを応援します。

7月7日発売の
「ニッポンエール 栃木県産にっこり梨SODA」

JA全農青果センター HPリニューアル

採用専用ページを開設、企業ムービーも掲載

JA全農青果センター㈱は、5月30日に新たな会社ホームページを公開しました。採用専用ページも開設し、就活生向けのムービーを掲載しています。【JA全農青果センター㈱】

制作期間はおよそ10カ月。2024年に新設した広報室が中心となって制作しました。企業情報や事業紹介だけでなく、JAグループの販売会社としての使命や、「農」と「食」に対する思いをより視覚的に表現することにこだわりました。

ホームページと企業ムービーには、会社の従業員だけでなく、産地や販売先の方々も登場します。非常にたくさんの方に協力をいただいて完成することができました。

JA全農青果センターは今後もさまざまな活動を通じて、企業価値の向上と農業への貢献に取り組んでいきます。

YouTubeは
こちらから

HPはこちらから

HPリニューアルに合わせて作成したポスター

JA全農の産地直送通販サイト
JAタウン ショップ紹介

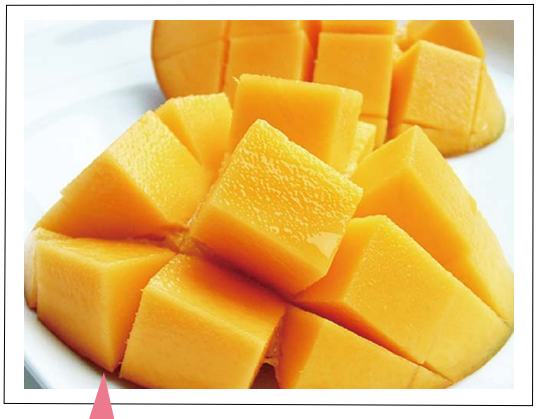
JAみやざき Tege Mahalo

今や宮崎を代表する果物となった完熟マンゴー。トロピカルで濃厚な甘みが多くのファンを魅了しています。

収穫前になると実にネットをかぶせ、完熟するまで「じーっ」と待ちます。そして、完全に熟れネット内にポトリと自然に落下したものを収穫しています。

中でも「太陽のタマゴ」は糖度15度以上、大玉で傷がなく着色が良いなど、厳しい検査基準をクリアしたマンゴーだけに贈られる称号です。

生産者が手間と愛情をかけて大切に育てたマンゴーをお届けします。常夏を想像させる香りと食感をぜひご賞味ください。


みやざき完熟マンゴー「太陽のタマゴ」（3L）
9300円（税込み）

ご注文は
こちらから

▶ JAタウンはこちらから https://www.ja-town.com
▶ お問い合わせは ✉ shop@ja-town1.com

発行／全国農業協同組合連合会　2025年（令和7年）7月7日発行（毎週月曜日発行）
第3510号　編集・発行人／広報・調査部　澤田洋志
〒100－6832 東京都千代田区大手町1丁目3番1号JAビル　TEL03（6271）8055

『JA全農トピックス』の公式
Xはこちらから

私たち全農グループは、
生産者と消費者を　安心で結ぶ懸け橋
になります。